

上石 弘●著

頭蓋顎顔面外科 —術式選択とその実際

書評者

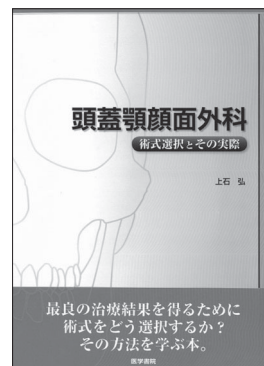
川上 重彦（金沢医大教授・形成外科学）

本書の著者である上石弘先生は長年近畿大学形成外科教授としてご活躍され、2006年にご退職された後はNPO法人クラニオフェイシャルセンターを立ち上げ、その理事長として頭蓋顎顔面外科を志す後進の指導に精力を傾けておられている。著者は日本における頭蓋顎顔面外科領域の草分け的存在であり、私も著者からご指導を受けた一人である。

約20数年前、私は著者が北里大学におられたときに開催された上・下顎骨切り術のワークショップに参加し、その手術を見せていただいた。さらにその数年後、私は本学で行われた著者による斜頭症の手術の助手を務めさせていただき、その知識、技術を肌で感じさせていただいた。それ以降、私も頭蓋顎顔面外科への道を歩み始めたと言っても過言ではない。また、著者は医科と歯科のダブルライセンスをお持ちで、その修練をされているが、私はさまざまな機会において、頭蓋顎顔面外科における歯科の知識の重要性、さらにその技法を著者から教えられてきた。

さて、本書は「総論」から始まり、「先天異常」「発育異常」「外傷」「腫瘍」「美容外科」の5章から構成されている。それぞれの項目は疾患別に記載され、一つ一つの疾患ごとにまずその病態と生理が解説され、次に症例を呈示して、その症例に対する術式の選択と予想される結果が述べられている。そして、実際に行った手術とその術後結果および評価が呈示され、その術式を選択するに至ったポイントが解説されている。また、術式選択や治療の際に求められる知識、留意点などが、最後に「解説」として記載されている。

本書は要点が非常に簡潔に記載されているのが特徴であり、頭蓋顎顔面外科領域の疾患解説書として本書を読むと、逆に物足りなさを感じるかもしれない。しかし、本書は頭蓋顎顔面外科疾患を実際に治療するための実践書である。したがって対象となる読者は、頭蓋顎顔面外科領域の知識を全く持ち合わせていない形成外科医ではなく、少なくとも専門医資格を取得し、本領域の疾患や手術法について一通りの知識を持ち合わせている医師となろう。



さらに言えば、頭蓋顎顔面外科医を専門としてこれからこの道を進もうと考えている形成外科医にとって最適の書であろう。

本書には、著者が30年以上の長きにわたって経験されてきた症例と、その結果の蓄積を基に導き出された診療・手術のポイント、さらには“コラム”としてまとめられた著者の格言のような「独り言」などが至るところに散りばめられている。経験のない医師にとっては、これらのフレーズが何を意味しているのかがすぐには理解し難いかもしれないが、経験を積み重ねれば積むほど思い当たるフレーズが多くなる書であろう。一読して終えるのではなく、何度も読み返してほしい。その都度、著者が伝えたい意味が新たに増えてくる。

A4 頁208 2008年 医学書院刊
定価18,900円（本体18,000円＋税5%）
[ISBN978-4-260-00602-6]